テーマ：

トマトから広がる色んな世界

東京都
ゆうき山保育園
蒲原先生

この活動の特徴

「凛々子」活用のポイント①

オリジナルの栽培ツールや制作物を作り、工夫しながら愛着をもって育てる。

「凛々子」活用のポイント②

保護者も栽培に参加できるよう動画作成やレシピブックなどの工夫をした

活動のねらい

- トマトの生長過程を知り、収穫や調理を楽しむ
- トマトの栽培に保護者にも目を向けてもらうことで、子どもと保護者のやりとりのきっかけを作る
- 一人ひとりが責任を持って、一つのことに取り組む機会とする

活動の概要と流れ

対象学年：５歳児（１７名）
実践期間：４月～９月

時期	学習活動
４月	各家庭にプランター・ペットボトル（ジョウロ用）を準備してもらう
	栽培前の調べ学習／土作り、プランターに自由画を描く
５月	ジョウロ用ペットボトル作成／定植
	クラスだよりで保護者に世話の呼びかけ
	保護者向けの動画を配信（土作り～定植の様子）
７月	収穫／冷やしトマトを作る／ほかの食べ物の種を育ててみる
８月	トマトクイズ図鑑作成／トマトを使用した調理保育／レシピ集作成
	トマト畑の片付け
９月	トマトを使用した調理保育

ここがポイント！取組の工夫と実践の成果

責任を持って育てる工夫

一人ひとりが責任を持って育てられるよう、土作り、鉢へのお絵描き、ペットボトルのジョウロ作りなど栽培前から園児の参加意識を高める工夫をしました。

栽培中に子どもたちが「お花が咲いた」「つぼみがある」「トマトの実がついている」と小さな変化に自分で気づき喜んでいたのが印象的でした。また、お休みのお友達の鉢にも水をあげたり、自分だけでなく周りにも目を向けお世話をするやさしさが見られました。

うまくいかないことや生長の違いにも目を向ける機会に

自分のトマトの状態を見て、「こうなったけれど大丈夫？」、お友達のトマトに実がなったのに「自分のにはまだ実が付かない」と不安になったことも、自分で育てているからこそ経験できました。このことを通じて、うまくいかないことも、みんなが同じではないこともあるということを知るよい機会となりました。

食べ物の種への興味感心が広がる

トマトを育てるうちに、子どもたちは他の食べ物の種に興味を示し、給食で出たスイカ、トウモロコシ、梅などの種を育てることに。「あっ！ 種があった！」「植えてみよう」というのが流行りになったほどです。ある子が家から持ってきたメロンの種を植えると、芽が出て、花が咲いて…と育ち、子どもの好奇心と行動力には驚かされました。

子どもと保護者の真ん中にトマトがある

子どもと保護者のコミュニケーションの一つになればと、トマト栽培の過程を動画やクラスだよりで発信。子どもたちが保護者に自分の苗の生長を見てもらい、話題にのぼる様子も多々みられました。また、収穫したトマトを家に持ち帰り、料理を作ったらレシピを書いてファイルにいれてもらうように協力を呼びかけると、複数の家庭で料理をしてレシピを紹介してくれました。

しめくくりに「トマトクイズ図鑑」を作る

園でも調理を実施。冷やし野菜、はちみつ漬け、トマトソースと、トマトそのままから、少し手を加えたものまで段階的にメニューを選択したことで、それぞれの味の違いに注目することができました。

栽培活動を終えて、有志で「トマトクイズ図鑑」を作成。栽培前に抱いていた疑問の答えが自分のトマトの生長記録にあることを発見したり、想定と違ったりと、保育士も気づかなかった子どもたちの観察の細かさを知ることができ新たな発見がありました。

先生から一言！実践を通して

例年畑やプランターでトマト栽培をしていましたが、本プログラムに参加して一人一鉢ずつ育てられるよい機会となりました。栽培前にトマトについて知っていること、育てるために必要なものを調べて、栽培活動を始めたことで、栽培後の「トマトクイズ図鑑」作りまで、子どもたちの興味関心を維持できました。トマトに対してさまざまな発見をし、また想像と違う成長過程の経験も楽しめました。子どもと保護者、園とのコミュニケーションもトマトを通じて深められたのではないかと思います。

受賞理由

子どもたち一人ひとりが責任を持って一つのことに取り組む機会として本プログラムを活用し、その効果を最大化する先生方のアイデアが光ります。栽培や調理活動にとどまらず、保護者との交流に動画配信を取り入れる等、ライフスタイルに合わせた工夫や積極的な姿勢が効果的かつユニークさを放っています。